# 1950 年代台湾の通俗出版をめぐる文芸政策と専業化

張　文菁

はじめに
第 1 節　揺れる文芸政策と通俗出版
第 2 節　「反共＋黄色」小説の横行と文壇の分化
第 3 節　文化出版公司と金杏枝
おわりに

(要約)
台湾文学史にとって、1950 年代は反共文学の時代である。しかし、国民党の文芸政策は最初から厳格な基準があったわけではなく、当時の新聞や通俗誌は、「反共＋黄色（ポルノ）」要素を小説に加えることで、検閲を逃れ、かつ読者を確保していた。1954 年 7 月、商業主義的な出版物を排除するために発動された「文化清潔運動」は、むしろ『中国新聞』をはじめとする通俗誌の人気ぶりを裏付けるものだった。「反共文学」と「通俗」の棲み分けが明確になるにつれ、1950 年代末には貸本屋が街角に林立するほど増加し、通俗出版市場が盛況を迎えていた。そのなかに、言情小説で人気を博した文化出版公司の金杏枝がいる。処女作は 1959 年の『冷暖人間』とされるが、実はもともと 1956 年に出版された『酒家女』（著者紅嬌）の加筆版である。紅嬌から金杏枝への著者名の変更、さらに『酒家女』から『冷暖人間』への出版物としての精緻化は、出版社が女性読者層を意識し、通俗言情小説を主力のひとつとする方針が定まる過程であった。

## はじめに

台湾の通俗小説[1]について言及する際、まず思いつくのは 1960 年代から 1980 年代まで長らく台湾のエンターテイメント市場を席巻していた瓊瑤の存在である。しかし、瓊瑤に直接結びつく、1950 年代の台湾通俗出版、特に言情小説に関する状況はいまだに不明点が多い[2]。考えられる要因は、出版、流通や読者に関する詳細が解明されていないからであろう。本稿の目的は、1950 年代初期から 1960 年代前半、すなわち 1963 年瓊瑤の処女作『窓外』が出版されるまでの、新聞や雑誌に掲載された作品を通じ、当時の文芸政策、出版と作家をめぐる環境を概観することにある。

1950 年代について、現在の台湾文学史では一般的に「反共文学時代」とされる[3]。だが、それは台湾発の通俗小説が萌芽する時期でもあった。たとえば、葉石涛が『台湾文学史』において以下のように言及している。

> 失意と落胆とによって、五〇年代の一部の作家は現実を逃避し、いっそうのこと象牙の塔に隠れ、男女の私情をめぐる美しい夢を見ていた。鴛鴦蝴蝶派の小説がここにおいて復活した。五〇年代の文壇が高々と好色文学一掃の運動の旗を掲げたのは、このためでもある。これらの鴛鴦蝴蝶派の小説は、大陸時代の張恨水等の言情小説とは異なり、全く現実生活

の拠り所を欠いており、社会的観点を軽視し、ただぼんやりと道徳規範を留めているだけで、レベルは低かった。[4]

1950 年代の台湾に出現した通俗恋愛小説のレベルが低かったのは、ほかならぬ萌芽期だからである。その理由について、筆者はこれまで以下のように整理している。まず、1949 年に戒厳令の布告とともに制定された「台湾省戒厳期間新聞紙雑誌図書管理辦法」によって、日本や中国大陸からの出版物の輸入が禁止された。また、度重なる警察と行政の取り締まりにより、五四新文学作品のみならず、戦前中国大陸で出版された通俗小説までもが禁書となっていた。その徹底ぶりは、学校の図書館から辞書や参考書、工具書までもが排除され、「ほぼ真空状態」[5] になったと言われている [6]。一方で、1946 年から開始された小学校の義務教育によって若い中国語の読書人口が育成され続けた。断たれた中国大陸からの図書輸入、真空状態の図書館と出版市場、増大する中国語の識字者数、これらがすべて台湾の社会と政治の状況に見合った図書の大量生産を促したのである。その結果、台湾の初期中国語通俗出版物は多くの無名の書き手によって創作され、市場が成長したと考えられる [7]。

## 第 1 節　揺れる文芸政策と通俗出版

具体的な通俗小説の作品例に入る前に、まず確認しなければならないのは 1950 年代初期の出版市場を左右した政府の文芸政策であろう。蔡其昌の研究によると、共産党との内戦に敗れて台湾に逃れた国民党の文芸政策は、当初、明確な基準がなかったという [8]。蔡の論文は、文芸政策に深く関わった張道藩 [9] の発言を拾い集めることで、当時の文芸政策の揺れを追ったものである。張道藩は、1952 年 1 月号『文芸創作』の巻頭で前年度の文壇について、このように回顧している。「文芸理論において、内容から形式まではまだ完成を見ず、創作や文芸の主な流れを作り出すに至らなかった。（略）このため文壇が散漫かつ混乱を呈するのはやむを得ない」[10]。さらに一年経った 1953 年にも、「わが政府がソ連のように文芸に対して厳しい統制を設けようとしないのは、それがもたらす弊害が利益よりも多いことを知っているからだ」[11] と、国民党政府の文芸政策に対する明確な基準を設けない姿勢を称賛した。だが、1953 年 11 月に蔣介石の『民生主義育楽二篇補述』が発表される [12] や、前言を自ら翻し文芸政策の制定を声高に擁護し始めた。1954 年 5 月には、「民生主義社会の建設の過程において、文芸は自由放任にすることで発展させるべきとして文芸政策を不要だと考える人もいるが、それは間違った思想である。文芸政策というものは、消極的な『統制』に限ることなく、積極的な『手引き』もある」[13] と述べていた。

蔡其昌の指摘通りならば、台湾における反共文学政策が定まったのは 1954 年に入ってからと考えるべきだろう。それまでは、1950 年に発足した国民党政府の意向を汲む「中華文芸奨金委員会」が、高額な賞金や出版補助制度で反共文学を募っていたため、国策を反映した作品が多く創出されてきた。これに加えて、反共文学政策の明文化で国民党政府にとって不安な要素を含む作品を抑制しようとした。作家向けの高額賞金と出版社向けの助成金をアメに例えるのなら、

1954年に設けられた文芸政策の基準は、行政側からの規制を可能にするムチと見るべきであろう。

では、1954年において、具体的にどんな出版物が批判の対象になったのか。まず、上記の『民生主義育楽二篇補述』に対する、張道藩の解釈から確認しよう。

> 総裁は上記〔注：文学や音楽、映画など〕各部門の文芸に対して、積極かつ建設的な主張を提出された。「純真」「素朴」の内容を以て、すべての赤色文芸と黄色文芸を一掃し、それに代替することを期待された。（略）総裁は文芸の商業化には反対なのである。商人は、文芸作品を売るために、群衆の好みに迎合するばかりだ。このため文芸の正常な発展が妨げられるほか、国民の健全な精神も損なわれるとお考えなのだ。[14]

目的は「赤色」（共産主義）と「黄色」（ポルノ）小説の規制である。だが、1949年以降厳しい輸入制限に加え、千にも上る五四新文学作家の作品を禁書にしてきた国民党政権にとって、もはや「赤色文芸」は懸念の対象ではない。ここで問題視されたのは、大衆に迎合するために商業化された「黄色文芸」である。

張道藩の文章からわずか2ヶ月後、中国文芸協会[15]の常任理事だった陳紀瀅[16]が、1954年7月26日に匿名で『中央日報』の第一面および『台湾新生報』に、「文化清潔運動／各界諸氏の一斉奮起を訴え／赤色黄色黒色の三害を撲滅せよ」という文章を寄稿した[17]。赤色と黄色に加え、新たに糾弾されたのは、「黒色」（猟奇・暴露）雑誌類である。

> 出版界において、利益だけを追求する少数の輩が文芸の名を騙り、「誨淫誨盗」〔注：悪事や淫行を奨励する〕の書物を専ら発行し、さらに噂をばらまき、他人のプライバシーを暴露する雑誌を出版している。（略）長らく社会に忌み嫌われ、一般の人々、特に真面目に新聞業に従事する方々に軽蔑される『黒色新聞』は、一部のいわゆる暴露雑誌を通して、（総裁の正確なる指示後も）言行を慎むどころか、逆にひどくなる一方だ。反共抗ソの神聖な基地で、傍若無人に公然と国民の健全なる精神に危害を加える毒素をまき散らしている。（略）すみやかに文化清潔運動を展開するため、各界に一斉奮起を呼びかけたい。文化三害、すなわち「赤色の毒」「黄色の害」「黒色の罪」をともに撲滅しよう。[18]

ここでは名指しこそしなかったが、当時人気を博していた雑誌『中国新聞』が批判されている[19]。以前、筆者が当該雑誌を精査した結果、大胆な性的描写を含んだ連載小説や政界の噂、スキャンダラスな暴露記事が多く掲載されていたことが確認できた[20]。陳紀瀅の投書から、いかに『中国新聞』の内容が当局の神経を逆なでしていたかがわかる。

約1ヶ月後に中国文芸協会は各新聞を通じ、「文化清潔運動」の名目において、1954年8月20日から28日までを期間とする民意調査の実施を発表した。その目的は「赤黄黒の三害」に当たる出版物を排除するための世論を形成することにあった。結果として、『中国新聞』を初めとする、

猟奇・暴露雑誌に照準を合わせたように 2614 通もの検挙の書簡が寄せられた。以下、中国文芸協会が分類した検挙内容[21] の 8 項目を簡単にまとめた。

一、密かに流布された赤色の宣伝物：封書内の資料および証拠は、本会を経由して治安当局に届出。
二、常に黄･黒の二色を含む有害な文章を掲載する刊行物：雑誌は『中国新聞』『新聞観察』『新聞評論』『紐司』『聯合新聞』『偵探雑誌』『婦女生活』『自由亜州』『世界評論』『新希望』『影劇雑誌』『小説世界』など。単行本は『再嫁夫人』など。
三、日本語黄色刊行物：『ロンマソス』『アマトリア』『人間探究』『内外新聞』『ユアンス・アマトリア正続集』など。[22]
四、黄色映画：フランス映画『Le Diable au Corps』〔注：邦題『肉体の悪魔』〕
五、『中国新聞』（社主は唐賢龍）が国防上の機密を漏洩した件：本会が保安司令部に問い合わせた結果、機密の漏洩とされた発行号は法令に基づきすべて没収済みである。また、軍機条例第 4 条第 1 項、刑法第 230 条第 1 項により地方裁判所検察官李元芳が起訴。
六、被害を受けた件：被害者より提出された書簡は、本会の協力のもと、法律に基づいて起訴後に開示。
七、反共義士〔注：朝鮮戦争中に国連軍の捕虜となった中国解放軍の兵士のうち、中国への送還を拒否し台湾に渡った人のこと。当時は英雄とされた〕の証言：韓国では、『中国新聞』と『新聞観察』が中国によって台湾を侮蔑するための宣伝品として使われていた。
八、検挙ではないが、文化清潔運動に対して賛同する意見と方法の提供など多数。

民意を集計した結果、言うまでもなく、『中国新聞』をはじめとする、『新聞観察』『新聞評論』『紐司』などの雑誌が「三害」に該当するという結果になった。戒厳令が敷かれた時代において、国家機密の漏洩という誹りはどんな出版社にとっても重大な罪である。世論という後ろ楯を得た国民党政府は、民意調査が締め切られる前日の 8 月 27 日に記者会見を開き、『中国新聞』『新聞観察』『紐司』『聯合新聞』『世界評論』などの雑誌に対し、最長 10 ヶ月、最短 3 ヶ月の発行停止に処すと発表したのである[23]。

1954 年の台湾では中国語識字率が全人口に対して約 60％（約 525 万人）[24]、うち読者に数えられるのは更に少ないという状況に対し、発行されていた雑誌類は 278 種、うち文芸類 52 種、綜合類 16 種という不釣り合いの出版ブームが起きていた[25]。苛酷とも言える出版環境のなか、ほとんどの雑誌は政府からの資金援助、もしくは官庁の定期購入に頼らざるを得なかった。だが、政界や芸能人の噂、猟奇的な記事に加え、性的描写の多い小説を連載したことで当時の読者から支持を得た『中国新聞』や『新聞観察』、『紐司』などは、政府の補助を受けずに経営の維持に成功している数少ない刊行物だった。これらが、反共文学を推進する国民党政府にとって殊更に目障りだったのは言うまでもない。

以上のように、国民党政府は、成長する通俗雑誌の勢いを削ぐために、わざわざ中国文芸協会を通じて世論を形成し弾圧に乗り出したのである。文化清潔運動以前、大義や国策ばかりが叫ばれる政治情勢のなかで、これらの通俗雑誌はいかに当局の検閲をくぐり抜け、なおかつ読者の支持を獲得していったか。また、文化清潔運動後、いかに反共文学の制限から逃れ、市場を拡大していったか。次節では、1950 年代初期において、通俗雑誌のみならず、大手新聞の誌面をも飾った作品を確認する。

## 第 2 節　「反共＋黄色」小説の横行と文壇の分化

前節で触れたように、「文化清潔運動」後、赤黄黒の「三害」は有害文芸を判断する基準のひとつとなった。だが、それ以前の新聞や雑誌で連載された小説をみると、反共の要素を入れることで黄色と黒色の要素があっても反共文学とみなされ、政府の審査でも容認されていた。

蔡其昌は、1953 年に出版された『紅朝妖姫』の審査における国民党のダブルスタンダードを紹介している[26]。実録的な『紅朝妖姫』は、丁玲や謝雪紅、賀志珍、范瑞娟など実在する有名人の私生活を暴露しただけでなく、共産党要人との愛憎関係を誇大に描写した箇所も随所に見られるという。紛れもなく三害の基準に抵触するが、1953 年の国民党政府の審査を難なく通過している。審査結果は次の通りである。「使用された言葉や文字は、完全には宣伝の要求を満たさない。だが、その意図は汲むべきであり、反共の立場から逸脱していないため、発禁の対象から外すことができるだろう」[27]。つまり、暴露や性の要素は使い方によっては問題にされないということである。本書は共産党に媚びる女性の非道徳な一面、共産党員の乱れた性を暴くことで反共的として評価された。

このような「反共＋黄色」要素を持った読み物は、実はもっと早くから登場していた。たとえば新聞『大華晩報』での連載を経て、1950 年に出版された『紅魔女』（袁愛瓊）である[28]。物語は、大学在学中にソ連に通じるスパイ組織に誘われ、諜報活動に加わるようになった若い男性主人公を中心に展開する。最終的にリーダー格の女性スパイが共産党の非人道的なやり方に脅え、前非を悔いつつ反共陣営に加わるという、型にはまった「棄暗投明」〔注：暗黒を捨て光明な道に身を転じる〕で結末を迎える。国共内戦、スパイの暗躍に加え、男性主人公の艶めかしい女性遍歴が織りなす小説が、堂々と 1950 年の新聞誌面を飾っていたのである。

次に、同じく新聞連載小説『再嫁夫人』（蘭娘）【図 1】について見てみよう。本作は、初期の『聯合報』副刊〔注：

【図 1】
蘭娘『再嫁夫人・下集』
影劇雑誌社、1954 年

文芸欄〕で 1951 年 10 月から 1952 年 6 月まで連載され、その後、影劇雑誌社より上下の二冊にまとめられ出版された[29]。物語のあらすじはこうである。東北遼寧省出身の思春期を迎えた女性主人公の蘭が、家族が不在の夜に隣に住む男性に暴行される。その後も男性から執拗に関係を求められ苦しむも、家族の体面を保つために一緒に夫婦として生活することになる。共産党の八路軍の襲来で蘭と男性は避難を余儀なくされ、住み慣れた故郷を離れて台湾に移り住む。蘭とその子供は先に台湾で新生活を開始する。あとから台湾にやってきた男性は、蘭を利用してその周囲の友人から金をせびり取ろうと画策する。やがて彼女は友人の助けにより裁判所から婚姻が無効という判決を勝ち取り、晴れて自由の身となって台湾で出会った相思相愛の男性と結婚する。作中、折に触れて「偽満州国」や八路軍の悪事を批判するほか、国民党政府のもとで台湾での生活がいかに幸せで希望に溢れているかという描写も多い。しかし読む側にとっては男から再三に理不尽な性的関係を求められた描写のほうが印象的であろう。実際、『再嫁夫人』は 1954 年の文化清潔運動において「黄色図書」と名指しされる。そのせいか、筆者が調べた限り、現在では個人所有を除き、台湾の各大学や国立図書館に収蔵されていない。

一方、雑誌に掲載された作品は、唐賢龍[30]による『失足』が挙げられる。本作は、1952 から約 1 年間にわたり『中国文芸』[31]で連載され、1954 年に単行本として出版された。『失足』は、男性主人公に届いたかつての教え子羅娜からの手紙で始まる。主人公は、成都で教師を務めたときに、共産主義にのめり込んでいく彼女に対して深い印象を抱いていた。のちに北京で再会したとき、彼女はすでに共産党員となっていた。妻子ある身の主人公は、若い羅からの愛の告白、肉体の誘惑に抵抗できずに関係を結んでしまう。ふたりの関係を真剣に考える主人公は、羅が愛情からではなく、単に自分を共産党に誘い込むために接近したということを知らされ、国民党の工作員の手によって北京から脱出する。無事に帰宅して妻の愛情を再認識するも、羅に対する複雑な思いだけが心のなかに残る。人を操り、その感情までを利用しようとする共産党員のやり方がいかに卑劣であるかというのが本作の意図するところであると考えられるが、なんと言っても、教え子だった若い女性に心を動かされた男性が、彼女に向ける欲望の視線の描写が大きな比重となっている。

「反共＋黄色」小説を並べてみると、共産党の悪行と諜報活動は、淫らな男女関係や女スパイの色仕掛けというパターンで描写されることが多い。1950 年代初期のダブルスタンダードな検閲基準は、反共文学と通俗小説の見分けをいっそう困難にさせている。なぜならば、通俗出版社にとって反共という要素は格好の隠れ蓑となっていたからである。文化清潔運動の前まで、このようなタイプの小説は新聞や雑誌を通して、広く読まれていたことが想像できる。

1955 年 7 月、発行停止から 10 ヶ月ぶりに再開された『中国新聞』の誌面は、あいかわらず猟奇的な暴露記事が多い。だが、そこには大きな変化があった。従来の連載小説『香港某夫人』（秋田）に加え、事実を脚色したという『毛沢東的情人』（ある退職記者）や女スパイを題材とした『額外的愛情』（唐賢龍）と『反共間諜長篇実録：上海之夜』（李雯）、中国のスパイが香港の映画界で暗躍することを描いた『香島玫瑰』（文亦奇）など、一気に 4 本もの「反共＋黄色」小説を連載し始めた。これらの小説は、共産党の悪徳ぶりをそれまで以上に描きながら、性的描写もより

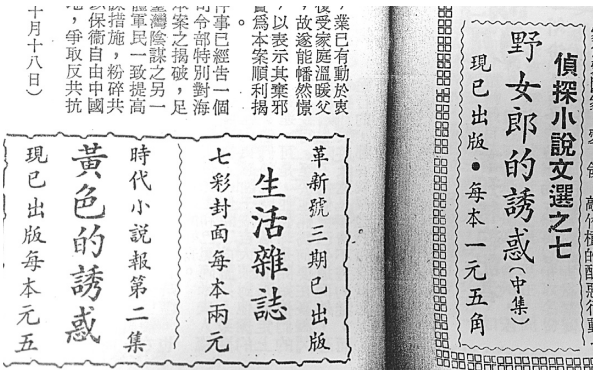
大胆なものとなっていた。だが、4ヶ月後の1955年11月に「香港某夫人」のみを残し、連載を始めたばかりの小説はわずか10回目で打ち切られている[32]。また、誌面を縮小し、さらに4元から1元への大幅な値下げを行い、合わせて猟奇・暴露記事の数も減らした。

1956年5月、唐賢龍の中国新聞社は、『偵探小説文選』や『時代小説報』などの雑誌を創刊して、猟奇・暴露記事よりも小説の掲載と出版に力を入れていく[33]。残念ながらこの両誌は現在では散逸し、雑誌の内容や出版の実態を知ることができない【図2】。だが、1957年6月の中国新聞社の出版目録広告から、約1年の間に『探偵小説文選』『時代小説報』に連載された小説の、単行本タイトル一覧が確認できる[34]。そこから、文化清潔運動によって文壇の攻撃や政府当局の弾圧を受けた中国新聞社が、改心して反共文学の流れに加わるどころか、隠れ蓑だった反共要素を脱ぎ捨てた姿が見える。羅列されたタイトルの数々からは、性的描写に加え、恋愛やサスペンス、ホラーなどの通俗的な要素を強調した小説が、短期間に量産されたことが推測できる。この中国新聞社が小説により重心を傾けていくことが意味するのは、ほかならぬ反共文壇に見切りをつけた通俗出版が順調に事業を拡大する姿であろう。

蔡其昌によると、「文化清潔運動」のあと、内政部は以後の出版言論の抑制に法律の依拠となるように9項目の禁止令を布告した。しかし、この禁止令は、言論の自由を保障する憲法に抵触するだけではく、当時アメリカとの間に締結した共同防衛条約にも反するとして、メディアおよび民意代表からの激しい非難を受けたという[35]。このことは、通俗出版側にとって、国民党政府や反共路線と真っ向から対立しなければ、戒厳令下でも許される言論の幅がある程度存在することを確認できた事案と言えよう。

行政側から規制が掛けられない以上、残された道は、中国文芸協会が文化清潔運動の守り手として台湾各地で「三害」に関する座談会（1956年）を開き、不良書物の不読運動（1958年）を展開するほかなかったようだ[36]。だが、それは単に読者への啓蒙、道徳的な観点からの非難のみに留まっており、通俗出版市場の成長に対する具体的な抑制力を欠くものであった。

その証拠に、1950年代末までには、台湾の至るところで林立する貸本屋に通俗小説が並ぶよ




【図2】
『中国新聞』第373号（1956年11月17日）

うになったのである。1959 年 3 月の『聯合報』には、次のような記事が掲載されている。

> 現在台北には百軒余りの貸本屋が存在し、常に六、七万人が利用している。うち学生が多く、軍人、教師や公務員、主婦がそれに次ぐ（略）最近、記者は真善美、祥記、呂氏、第一、大東、黎明、大衆などいくつか規模の大きな貸本屋で調査を行った。その結果、いずれの書店でも武侠がもっとも読者の支持を受け、それに続くのが文芸、言情、スパイ、探偵、そして翻訳された世界の名作であることが分かった。各種の貸出率のなかで武侠小説が全体のほぼ 5 割以上を占める。
>
> それぞれの階層の貸出の内訳を見てみると、男子学生の愛読書はほとんどが武侠で、女子学生は世界の名作と文芸、軍人は武侠、教師・公務員は武侠とスパイと文藝、主婦は言情、探偵と文芸、そして大学教授や技術者、医師などは武侠と探偵であることが分かった。[37]

この記事からわかるのは、ほかならぬ 1950 年代末には、台北市内で貸本屋が多く存在したこと、市場には大量な通俗小説が流通したこと、またそれを享受する読者が各階層に出現していたことである。さらに、武侠、言情、文芸（孟瑤、張秀亜、王藍の作品など）、探偵などそれぞれの類型に合わせて、性別や階層別に読者が分化していたことも注目すべきであろう。

1959 年の通俗市場の発展から回顧すると、1954 年に起きた文化清潔運動の抑制は、確かに一過性のものだったと言わざるを得ない。しかし、台湾文壇にとって運動そのものの影響はもっと広範囲で根強かったであろう。その及ぼすところは以下のようにまとめられる。まず、反共という大義のもとで、民衆に対する教化啓蒙の責務を自任した 1950 年代の文壇は、実は結束を誇った一枚岩ではなく、商業主義を標榜する通俗出版社が存在していたのである。これらの通俗出版社は、たとえ道徳の観点から非難され、また国民党政府の庇護を受けることができなくても、自活する路線を見いだせていた。次に、それまで「反共」要素を重視する余り、逆に曖昧だった文芸作品の評価に対し、判断する基準が設けられた。これにより、読者に迎合する通俗出版物は「三害」や「誨淫誨盗」としてレッテルを貼られることになるが、反共文学陣営との境界線も明らかになり、自由に発展できる「場」が生まれたと言える。

政府は「戦闘文芸」を奨励するなど、反共文学の拡大に寄与する次の一手を考案するものの、文化清潔運動以降、その流れは次第に衰えていく[38]。また、1956 年台湾大学で創刊された『文学雑誌』から生まれる現代主義文学は、1960 年代に入るとエリート層を中心に受け入れられ、純文学の座に就く。一方で、「三害」や「誨淫誨盗」として汚名化された通俗出版界は、反共文壇陣営との決別により、より自由に発展できる領域を獲得し、商業化がいっそう進んだと言える。第 3 節では、通俗出版が無名な書き手による濫作から脱却し、専業作家を囲い込み、類型に特化していく例を確認する。

## 第 3 節 文化出版公司と金杏枝

作家三毛が「逃学為読書」のなかで、若い頃に貸本屋に通い詰めた読書体験を次のように綴っている。

> 中一の年、成績はまずまずだった。順位が中ぐらいで、留年はしなかった。
> 夏休みがまたやってきた。私は学校の鞄を投げ捨て、待ちきれないように貸本屋に走った。（略）その店は、「建国書店」ほどの品格がなく、良い本も悪い本も混在していた。貸本屋に長らく通ったわたしは、金杏枝のものを、一度だって間違えて手に取ったことがない。[39]

1943 年生まれの三毛は、戦後台湾に移った外省人の知識人家庭のなかで育った。そんな彼女の中学生時代はちょうど 1954 年から 1959 年頃である。三毛は貸本屋「建国書店」でまず児童書や翻訳小説を読み、それから小学校五年生で『紅楼夢』に夢中になり、入学試験の準備しながらも金庸の『射鵰英雄伝』を読破したという。それでも金杏枝の小説を「悪い本」として位置づけた。読んだこともない作家をこのように判断する原因のひとつに、当時の文壇から汚名化されつづけた、この類型の小説に対する先入観が影響したであろう。

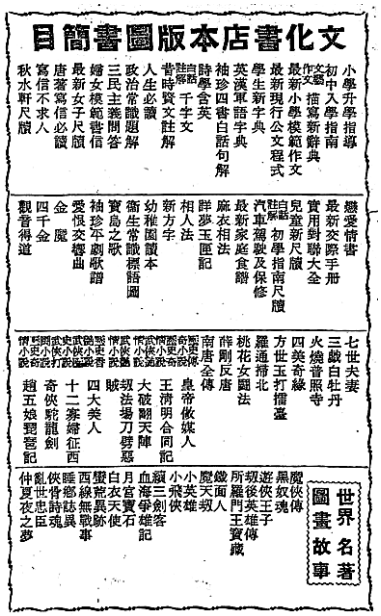
ここからもわかるように、1950 年代末には金杏枝は通俗小説作家として一般の読者に広く認知されていた。にもかかわらず、金杏枝に関する資料は存在しないどころか、作家の本名や性別、出身などまったく不明のまま現在に至っている[40]。現在、金杏枝の作品をもっとも多く所蔵しているのは台湾国家図書館であり、その目録では、1961 年出版の『悲歓人生』から 1975 年『春遅花未開』まで計 23 冊が確認できる。また、国立台湾図書館にも、1959 年『冷暖人間』から 1971 年『秋水紅菱』の 14 冊が所蔵されている。国家図書館と国立台湾図書館の蔵書の多くは重複しており、文化図書公司の出版目録と合わせて年代順に整理すると、1959 年から 1975 年まで全 37 作である。

【表 1】は、金杏枝の作品と所蔵図書館、出版年をまとめたものである。1969 年までの 10 年間、金の作品はもっぱら文化図書出版公司から出版されていた。当時の目録や広告を見ると、「金杏枝創作第一部『冷暖人間』」とある。だが、筆者が調べる限り、1956 年に紅嬌の名義で出版された『酒家女』が『冷暖人間』の原型となっている。数度の加筆を経たのち、最終的な形に落ち着いたのは 1961 年以降のことである。著者名と作品名の両方に相違があるものの、金杏枝の出現は 1956 年と見るべきであろう。

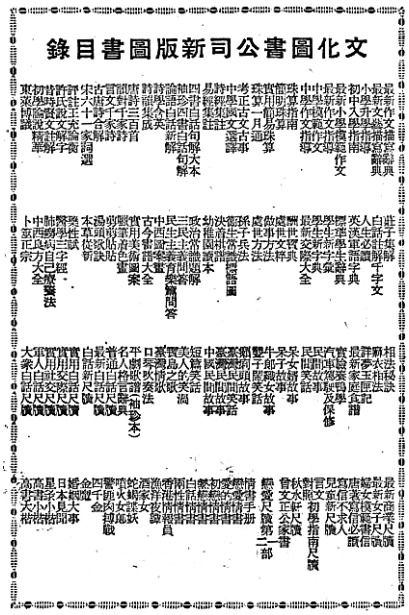
金杏枝の作品に入る前に、まずは金杏枝という作家を見いだし専属作家まで育てた出版社、文化図書公司の発展を確認する必要があるだろう。文化図書公司の前身は、台湾書店[41]の販売拠点のひとつ〔注：分銷処〕であり、その名も文化書店であった。文化書店の早期出版目録[42]には、中小学校の入学ガイドや辞書などの実用書をはじめ、『三戯白牡丹』『奇侠駝龍剣』のような白話小説や武侠小説もあった【図 3】。うち、『金魔』（馮玉奇、1954 年 1 月）、『四千金』（馮玉奇、

表 1　1956 年から 1975 年間の金杏枝作品一覧（筆者作成）

| | 書　　名 | | 出版年 | 国家図書館 | 台湾図書館 |
|---|---|---|---|---|---|
| 文化図書公司 | | 酒家女（紅嬌著） | 1956 | ○ | ○ |
| | | 酒家女・下集（紅嬌著） | 1957 | ○ | |
| | 1 | 冷暖人間（酒家女＋酒家女・下） | 1959 | | ○ |
| | 2 | 春風秋雨 | 1960 | | ○ |
| | 3 | 夢裡相思 | 1960 ～ 1961? | | |
| | | 冷暖人間・続集 | 1961 | | |
| | 4 | 彷徨的愛 | 1961 | ○ | |
| | 5 | 悲歓人生 | 1961 | ○ | ○ |
| | | 冷暖人間・合訂本 | 1961 ～ 1962? | | |
| | 6 | 晩霞 | 1962 | | ○ |
| | 7 | 春望 | 1962 | | |
| | 8 | 毋忘我 | 1962 | ○ | ○ |
| | 9 | 悲秋 | 1962 | ○ | |
| | 10 | 長相憶 | 1963 | ○ | |
| | 11 | 離恨天 | 1963 | | |
| | 12 | 回想 | 1963 | ○ | ○ |
| | 13 | 交換 | 1963 | ○ | ○ |
| | 14 | 心願 | 1964 | ○ | |
| | 15 | 離愁 | 1964 | ○ | |
| | 16 | 親情 | 1964 | | ○ |
| | 17 | 迷惘 | 1964 | ○ | ○ |
| | 18 | 長春樹 | 1964 ～ 1966? | | |
| | 19 | 一樹梨花圧海棠 | 1966 | ○ | |
| | 20 | 薔薇処処 | 1966 | | ○ |
| | 21 | 沸点 | 1966 | | |
| | 22 | 一寸相思一寸愁 | 1966 ～ 1967? | | |
| | 23 | 路長情更長 | 1967 | ○ | |
| | 24 | 痴痴的等 | 1967 | | ○ |
| | 25 | 潮起潮落 | 1967 ～ 1968? | | |
| | 26 | 甜酒満杯 | 1967 ～ 1968? | | |
| | 27 | 永遠的懐念 | 1968 | ○ | |
| | 28 | 生命似燭光 | 1969 | ○ | |
| | 29 | 情天霹靂 | 1969 | ○ | |
| | 30 | 情人的眼涙 | 1969 | ○ | |
| 立志 | 31 | 愛心 | 1970 | ○ | ○ |
| | 32 | 花落心深処 | 1970 | ○ | ○ |
| 新生 | 33 | 秋水紅菱 | 1971 | ○ | ○ |
| | 34 | 日落日出 | 1971 | ○ | |
| 先鋒 | 35 | 失落的過去 | 1973 | ○ | |
| | 36 | 情難了 | 1973 | ○ | |
| | 37 | 春遅花未開 | 1975 | ○ | |




【図 3】
裘麗『愛的情書』
（台湾、文化書店、1955 年 1 月再版）




【図 4】
裘麗『白話情書』
（台湾、文化出版、1957 年 3 月）

1954 年 3 月）および『愛恨交響曲』（馮左明、出版日不明）は 1950 年以降に創作された小説と見てよいだろう。

また、2 年後の 1957 年 3 月の出版目録[43]には「文化図書公司新版図書目録」とあり、すでに文化書店から名称を変更していたことがわかる。目録には従来の伝統的な民間故事、児童書や実用書のほか、裘麗の『情書手冊』『恋愛情書』など手紙の形式で男女の恋愛の進展を綴るシリーズも現れている【図 4】。注目すべきは、新たに加わった『香港情報員』（裘麗、出版日不明）、『漁洋夜譚』（作者、出版日不明）、『酒家女』（紅嬌、1956 年 1 月）、『蛇蝎諜妖』（裘麗、出版日不明）、『噴火女郎』（作者、出版日不明）、『警匪肉搏戦』（司馬琴、1956 年 3 月頃）の 6 作品だ。現在では『酒家女』と『警匪肉搏戦』のみが現存するため、残りの 4 作品については『酒家女』と『警匪肉搏戦』の巻頭にある広告から推測するほかないが、前節で見てきたような「反共＋黄色」要素を題材として用いているのがわかる[44]。

【図 5】
紅嬌『酒家女』
文化図書公司、1956 年

それでは、金杏枝の『酒家女』【図 5】はどうであろうか。

この物語は、1947 年の台北を舞台に紅嬌という源氏名をもつ本省人女性が、ある日来店した外省人男性客何杏痴と恋に落ちたところから物語が始まる。何杏痴は紅嬌の水商売に染まらない純粋さに惹かれ、すぐに結婚を申し込む。しかし、紅嬌を金のなる木としか見ていない養母は結婚を許さず、もし家を出るのであれば 50 両の黄金が必要と条件を出す。彼に気前よくこれを支払ってもらい、紅嬌は晴れて自由の身となり、はじめて自分の本名が金杏枝だと知る。何杏痴は、両親の希望だったアメリカ留学に同意することで金杏枝との結婚を許してもらい、さらに自分が不在の間でも彼女が家に住むことも承諾してもらう。留学を前にして、ふたりは日月潭と阿里山へ旅行し、金杏枝は彼に台湾の名勝地を紹介し解説する。何杏痴が留学に出発すると、彼女は高校の卒業を目標に学業に打ち込む。しかし、金杏枝に横恋慕した何杏痴の従兄が、自分の求愛が叶わないとわかるや、彼女が水商売の女性だったことを何杏痴の母親に告げ口してしまう。何杏痴の将来を思って結婚を諦めた金杏枝が、高校を続けながら逞しく生きようと決心するところで、物語は終わる。

終戦後の国民党治下がいかに希望に満ちているかというお決まりの記述はあるものの、本作が特殊なのは、ほかならぬ本省人女性の視点から書かれた点にある。さらに、終戦直後の台北を舞台として、外省人男性との恋、通貨の不安定を反映した金取引、日月潭や阿里山の風景、先住民族の生活、日本統治時代の回想などが盛り込まれている。1950 年代の外省人作家による反共や郷愁を題材にした小説が多くあるなか、ひときわ台湾に関する要素を多用しているのが印象的である。

作者紅嬌は、『酒家女』の巻末に次のような言葉を残している。

> 私は水商売の女だった。これは、私自身の人生のなかで起きたことを書いたものなので、すべてが本当の話だ。（略）私が杏痴の家を離れたときはちょうど民国 38 年〔注：1949 年〕の秋だった。すでに 7 年も経ってしまったが、その間に経験したのは本当に笑いあり涙ありのことばかりだった。（略）前もって言わなければならないが、私はもう水商売の女性ではない。なぜならば、もう本当の有意義な人生を獲得している。私と杏痴の愛はいったいどんな結末を迎えたかについて興味を持ってくださる方もいるかもしれない。未熟な私の文筆をお嫌いでなければ、忙しくとも時間を作ってこの数年の懸命な頑張りをみなさんに詳しくお伝えしたいと思う。[45]

前出の『再嫁夫人』と同じように、専業の作家ではない著者は、作品が自分の実体験をまとめた自伝だと強調している。作中に出てくる女性主人公の名前が作者本人と同じであるのもそのためであろう。作者紅嬌が続編の執筆に取り組むことを仄めかした通り、2 年後の 1958 年、続編『酒家女・下』が出版される。

『酒家女』が 1 ～ 8 章の構成に対し、『酒家女・下』は 9 ～ 16 章、1949 年から 1955 年の台北を舞台にしている。物語は、金杏枝が何杏痴の家を出た 2 年後、ふたりが再会したところから始まっている。2 年間の金杏枝の生活は回想の形式で綴られており、しばらくの間水商売に戻った

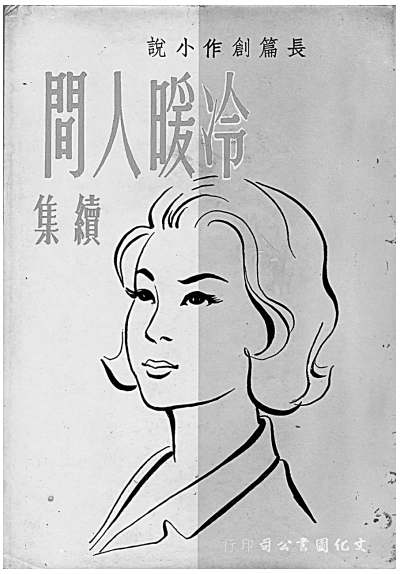
彼女は、常連客の愛人として生活費を受け取り、おかげで貧しい友人も助けることができ、高校も卒業できたというものだった。一方、何杏痴は留学を中断し親の命令で愛情のない結婚をしていた。金杏枝は何杏痴の家庭を壊すのが忍びないものの、彼の要求に応じて同居をはじめ、やがて子供ができてしまう。物語の最後は、金杏枝が、不妊に悩む何杏痴の妻に子供を託し、身を引く形で南部の高雄へ引っ越すところで終わる。

作家紅嬌は、『酒家女・下集』の巻末で続編を出版するまでの経緯について語っている。

> 『酒家女』を出版したあと、多くの読者からお手紙をいただいた。そのうち、女子学生がもっとも多く、次に軍人、商人が続く。（略）みんなは私と杏痴の間の愛がいったいどんな結末を迎えるのかに関心を持ち、私に続編の出版を求めた。続編については、そもそも出す予定はなかった。なぜならば、38 から 40 年の 2 年間〔注：1949 ～ 1951 年〕は、生活は乱れ堕落とも言える状態だったからだ。（略）生活のため、杏痴が私のために養母に払った身請け金を彼に返却するためには、身よりのない弱い女には、体を犠牲するのでなければ、ほかに生きる道がないのだ。[46]

ここでまず注目したいのは、女子学生からファンレターが送られてきたことである。『酒家女』が出版された 1956 年というのは、前節で見たように、雑誌『中国新聞』がようやく反共路線と決別しようとした頃である。反共文学、そして「三害」や「誨淫誨盗」として貶められる性的描写の多い通俗小説がはん濫するなかで、本作は、教義的な記述がそれほど多くなく、また露骨な性的描写を避けたのが特徴的であろう。実際、『酒家女』と『酒家女・下』は、一貫して本省人女性の視点から描いた、成就されない恋と苦しい境遇のなかで成長する物語である。このため、女性からの高い支持を得たのも頷ける。なお、1965 年に『酒家女』を原作とした台湾語映画『難忘的車站』が公開されており、この作品の人気が 1960 年代まで持続したことを裏付けている。

1959 年、文化図書公司は『酒家女』と『酒家女・下』を合本して再出版。書名は『冷暖人間』に改められるとともに、作家名も物語に合わせて、紅嬌から金杏枝に変更した。1961 年 9 月、文化図書公司は、再び続編（『冷暖人間･続集』）【図 6】を出版した。今度は、もとある『冷暖人間』の 16 章をさらに発展させ、一気に 24 章も追加した。物語は、高雄で看護師学校を卒業した金杏枝が、金門島勤務を志願し、共産党の絶え間ない砲撃にもめげない兵士と島の住人の姿を描いた。金杏枝の悲恋も、何杏痴の妻が病死したことによって、ふたりがめでたく結




【図 6】
金杏枝『冷暖人間・続集』
文化図書公司、1961 年

ばれることになった。『冷暖人間・続集』は、それまでのような恋愛中心の叙述ではなく、共産党軍の攻撃に耐える人びと、国家のために払う犠牲など、反共文学を彷彿させるようで唐突な印象を抱かせるものであった。

筆者は、1962 年 3 月に再版された『冷暖人間・合訂本』を確認しており、1961 年 9 月に『冷暖人間・続集』が出版されると、すぐに『冷暖人間』と続編を合わせた合訂本が出版されたと思われる。わずか半年の間に続編、合訂本の出版、さらに合訂本の再版が次々と発行されたことになる。本作に対する売れ行きの良さの現れであろう。

『酒家女』が最終的に『冷暖人間・合訂本』にたどり着くまでの過程は、総合出版社としての文化図書公司が、通俗言情小説を主要な出版類型のひとつとしてみなすようになったことを表している。もっとも注目すべきなのは、目録上の作家やタイトル、題材の変化である。1961 年に出版された『冷暖人間』の巻末にある目録を確認しよう。

金杏枝：『春風秋雨』『夢裏相思』『悲歓人生』『彷徨的愛』
黎　隠：『葉落花残』
林静蘭：『天涯飄萍』『難忘』『偏愛』
裘　麗：『不了情』『錦繍年華』『断腸紅』『碧海青天』『桃李滿天下』『風花雪月』『天長地久』
馮雨月：『月落烏啼』
林淑華：『愛似浮雲』
呉美凝：『情火』
張海萍：『一山紅葉為誰愁』

前節で紹介した『中国新聞』の目録と比べると、その差は歴然である。1957 年の『中国新聞』の目録では、性的描写を想像させる露骨なタイトルが並び、作家名を確認することができない。しかし、1961 年の文化図書公司の目録では、むしろ作家を中心に紹介している。これが意味するのは、人気作家、すなわち通俗小説を専業とする作家の出現である。また、タイトルは、恋愛を中心としたものが並び、通俗恋愛小説という類型に対する需要の高さをうかがわせる。

金杏枝のような人気作家が生まれたことは、出版社が無名な作家を使って、低俗な題材で大量に作品を出版するという方針からの脱却を意味する。すなわち、専業作家を囲い込み、その著作をシリーズ化し売り込む方式が、通俗言情小説でも採用されたと指摘できるだろう。それに伴い、販売方法ももちろん変わってくる。たとえば、女性読者の存在を意識した小説の表紙作りである。1960 年以降の文化図書出版の表紙の多くは、画家廖未林が担当する。悲恋を予感させるような、陰鬱な女性の横顔や視線、色鮮やかな表紙【図 7、8】は、通俗小説の付加価値を高め、ひときわ当時の女性読者の目を引いたに違いない。

【図 7】
画家廖未林による金杏枝作品の表紙例、文化図書公司出版

【図 8】
画家廖未林による金杏枝作品以外の表紙（文化図書公司出版）

## おわりに

本稿では、文芸政策と通俗出版の関わりから 1950 年代の台湾通俗出版の発展を追った。1954 年の「文化清潔運動」後、唐賢龍の中国新聞社は圧力に屈するどころか、逆にいち早く「反共文学」に見切りをつけ、いっそうの発展を遂げた。流通する図書の種類が増えるにつれ、1959 年の貸本屋利用者に見られるような、読者層の細分化も進んだ。台湾通俗市場の発展が特殊なのは、中国語義務教育の開始からわずか 10 年の間で起きたということであろう。

中国新聞社に代表されるような、性的描写を中心とした、猟奇・暴露出版は、疑いもなく、現在台湾の「八卦雑誌」〔注：スキャンダルを報じる写真週刊誌のこと〕の前身であろう。一方で、1950 年末から女性読者層の発見と掘り起こしに一役買ったのは、ほかならぬ紅嬌、すなわち金杏枝、さらに文化出版公司であった。文化出版公司から次々に出された悲恋を扱った小説は、初期の瓊瑤小説にも受け継がれた。また瓊瑤の代名詞でもある、非政治的かつ純愛の世界は、ほかならぬ 1950 年代の反共とポルノ要素の路線に対するアンチテーゼだったと言える。

---

**注**

1　本論における「通俗小説」とは、主に戦後台湾で広く読まれた娯楽性の強い読み物を指す。具体的には、貸本屋に広まった武侠小説や言情（恋愛）小説、探偵小説などである。特に言情小説は、のちに瓊瑤の小説が起こしたブームが象徴するように、台湾の通俗小説にとっては重要な類型である。

2　今までの研究では、中国の鴛鴦蝴蝶派文学から瓊瑤を直接結びつける傾向にある。たとえば、李欧梵『現代性的追求――李欧梵文化評論精選集』（台北：麦田出版、1996 年、188 頁）において、「五四時期のロマン主義の伝統、特にその中で最も流行した題材が目に見えないルートで台湾に伝わって（略）、瓊瑤文学の『創造性』の直接的背景となった」、林芳玫『解読瓊瑤愛情王国』（台北：台湾商務印書館、2006 年、57 頁）は、「五四運動の期間では浪漫的な愛情は古い封建社会に対する反抗であり、中国が現代化に向かう一部分である。60 年代の瓊瑤の小説はむしろ愛情そのもの自体の中身と意義に対する模索」とある。共に瓊瑤の作品を位置づけようとする研究であるが、その前段階である 50 年代における台湾通俗文学についての記述がない。

3　「反共文学」のほかに、1950 年代は中国大陸出身の女性作家を中心に郷愁や青春、海外紀行を題材とする散文が多く発表された。また、1956 年に台湾大学外文系で創刊された『文学雑誌』は、「五四新文学」の継承を否定した国民党政府の文芸政策の下で、西洋文学の作品やモダニズム理論を翻訳掲載したことも、やがて 1960 年代で活躍する「現代派」作家の出現につながった。

4　葉石涛／中島利郎・澤井律之訳『台湾文学史』研文出版、2000 年、95 頁。

5　王少南「禁書要禁得合理」『自由中国』第 12 巻 11 期、1955 年 6 月 1 日、31 頁。取締の徹底ぶりについて次のように記述している。「数日前に国民党党部および政府当局は、各部署と学校の図書室に対し禁書の排除を徹底するようにとの命令を下した。（略）厳格かつ迅速な執行だったと言えよう。今回は禁書に対し根本的な解決法が取られていた。延べ千人以上の共産党人および共産党に付和する者の名前を列記し、リストにある作者が係わった書籍は一律に排除された。（略）図書館はほぼ真空状態になった」。原文：「最近幾天国民党党部及政府当局下令各機関学校図書館室徹底査封禁書（略）可算雷厲風行。這次禁書採用釜底抽薪辦法，開列共匪及附匪分子名単達一千餘人，凡単上有名的作者所編的書籍一律査禁。（略）図書館幾成真空状態」。

6　発禁制度を批判した当時の記事やその影響について言及した論文は以下を参照。時事述評「関於書刊審査」（『自由中国』第 4 巻 10 期、1951 年 5 月 16 日、4 頁）、林少南「禁書要禁得合理」（前掲雑誌、31 頁）、林慶彰「当代文学禁書研究」（行政院文化建設委員会『台湾文学出版：五十年來台湾文学研討会論文集（三）』台北：文訊出版、1996 年、193-215 頁）、黄玉蘭「台湾五〇年代長篇小説的禁制与想像――以文化清潔運動与禁書為探討主軸」（台北：国立台北師範学院台湾文学研究所修士論文、2005 年）。蔡盛琦「1950 年代図書査禁之研究」（『国史館館刊』第 26 期、2010 年 12 月、75-130 頁）。

7 戒厳令や国語政策の転換によって、新たな書き手が生み出されただけでなく、読書層にも世代交代が見られた。すなわち、日本語読者が高齢化によって減少し周縁化されていくなか、若い中国語読者人口の増加し、出版市場の成長を支えたのである。詳しくは下記の論文を参照。張文菁「1950 年代初期の台湾における通俗雑誌の出版――通俗文学市場の形成とその諸相」（『野草』第 89 号中国文芸研究会、2012 年、31-52 頁）、「1950 年代の台湾における読者とその文学受容――言語および文化の分断からみる通俗小説の流行」（『野草』第 92 号、2013 年、94-114 頁）。

8 蔡其昌「国家機器与『反共文学』体制的建立」「戦後（1945―1959）台湾文学発展与国家角色」台北：私立東海大学歴史研究所修士論文、1996 年、85 頁。

9 張道藩（1897-1968）、中国貴州省盤県の人。1919 年に渡欧し、ロンドン大学、フランス国立最高美術専科で学んだ。1923 年に中国国民党に入党。1926 年に帰国し、交通部・内政部・教育部次長などを経て、1942 年には中央宣伝部長。1948 に来台し、1950 年 3 月に「中華文芸奨金委員会」を設立し、また「中国文芸協会」を組織した。1952 年には立法院院長に当選。彭瑞金／中島利郎・澤井律之訳『台湾新文学運動 40 年』（東方書局、2005 年、322 頁）より一部変更し転載。

10 張道藩「一年来自由中国文芸的発展」『文芸創作』第 9 期、1952 年 1 月、10 頁。蔡其昌、同上より転引、85 頁。原文：「文芸政策，由内容到形式還沒有建立起來。沒有形成写作的重心，沒有造成文芸的主流，（略）所以文壇不免散漫紛乱」。

11 張道藩「論文芸与反攻」『文芸創作』第 25 期、1953 年 5 月、8 頁。原文：「我們的政府，並不像蘇俄那様対文芸実施厳厲的統制，因為深知対文芸厳厲的統制，是利多弊少的」。

12 蔣介石「民生主義育楽両篇補述」、1953 年。そのなかで当時の文芸のあり方についてこう批判している。「商売人は（略）人々の好みに合わせる。（略）そのため新聞や雑誌に載せる文芸小説さえも、いまや低俗趣味の道に向かわされている。国が（略）計画してこれを解決しなければ、（略）どんなに重大な状況に陥るだろうか。（略）一般の国民は黄色の害を受けるか、さもなければ赤色の毒にかかってしまうだろう」。原文：「営利的人，為了（略）迎合群衆的口味，（略）甚至報紙雑誌的文芸，在今日，都不免走向低級趣味的道路。所以国家如（略）沒有計画來解決，（略）這是何等厳重的事情。（略）一般国民不是受黄色的害，便是中赤色的毒」。

13 張道藩「略述民生主義社会的文芸政策」『文芸創作』第 37 期、1954 年 5 月、8 頁。原文：「也許有人認為民生主義社会的建設過程中応該讓文芸作自由的放任的発展，無須乎文芸政策的，那是一種錯誤的思想。所謂文芸政策，不限定完全是消極的『統制』，同様也有積極的『倡導』」。

14 同上、7 頁。原文：「総裁対於上列各部門的文芸，均提出了積極的建設的主張，以『純真』『質樸』為内容，期能粛清和代替了一切赤色文芸和黄色文芸（略）総裁反対文芸的商業化。認為書賈為了把握文芸作品的暢銷，只有迎合一般群衆的胃口，一方面阻礙了文芸正当的発展，一方面損害了国民心理的健康」。

15 中国文芸協会は、張道藩・陳紀瀅・王平陵等が発起人となって、1950 年 5 月 4 日、台北の中山堂で成立大会と第 1 回委員大会を実施した。参加者は 153 名。常任理事として発起人の 3 名が選出された。成立後は各種の研究会・講習会や座談会等の文芸活動を行い、『文芸評論』『文芸天地』等の雑誌を発行した。政府寄りの民間文芸団体である。『台湾新文学運動 40 年』（彭瑞金、前掲書、322-323 頁）より一部変更し転載。

16 陳紀瀅（1908-1997）、中国河北省安国の人。北平民国大学、・ハルピン法政大学卒業。編集者・記者・特派員・ハルピン市文化委員会主任・立法委員等を歴任した。「中華全国抗敵協会」設立にあたっては、郭沫若や茅盾等 1930 年代文学者とも交流があった。1949 年に来台し立法委員・中華奨金委員等になったが、張道藩と共に「中国文芸協会」において主導的な役割を担い、「反共文学」を執筆した。『台湾新文学運動 40 年』（彭瑞金、前掲書、321 頁）より一部変更し転載。

17 中国文芸協会『文協十年』、中国文芸協会、1960 年 5 月、62 頁。次のような記載がある。「1954 年 7 月 26 日、（略）本協会の常務理事陳紀瀅が『某文化人』の名義で声明を出した。台北市中央日報および新生報によって最初に掲載されたこの声明は、『文化清潔運動』発動の第一声である」。原文：「（民国）43 年 7 月 26 日（略）本会陳常務理事紀瀅以『某文化人士』身分対社会発表談話，首由台北市中央及新生両報刊出，此為『文化清潔運動』発動的第一声」。匿名の理由に関しては、公正を期するため、さらに謙虚を示すためと説明している。また、発表後、すぐに「黒色雑誌」側から一斉に非難や反撃を受けたことも記述しており、当時の文壇内における「黒色雑誌」の勢力をうかがわせた。

18 中国文芸年鑑編集委員会『中国文芸年鑑（中華民国 55 年）』台北：平原出版、1966 年、299-300 頁。原文：「出版界少数唯利是図者流，編印誨淫誨盗卻冒名為文芸的書籍，或出版雑誌，専門造謠生事，揭発隠私（略）多年来為社会所詬病，為一般人士，尤為正当新聞工作者所不齒的《黒色新聞》，透過部分所謂内幕雑誌，不但不稍斂跡，反而変本加厲，在反共抗俄的神聖堡塁中，肆無忌憚，公然散布残害国民心理健康的毒素（略）擬即

展開文化清潔運動，籲請各界一致奮起，共同撲滅文化三害：『赤色的害』，『黄色的害』，『黒色的罪』。

19 「党員社会調査重要処理情形報告表」『中国国民党中央委員会工作会議第 22 次会議記録』（1953 年 3 月 17 日）によると、「黄色雑誌仍普遍発行、如「紐司」、「中国新聞」等，且能獲得政府配給紙，銷售量益行増加」（黄玉蘭、前掲論文、74 頁より転載）とあるため、前から国民党内部で、『中国新聞』を名指しで批判していたことがわかる。1953 年の蔣介石『民生主義育楽二篇補述』で非難されたのは、「赤色」と「黄色」の二種だったことから、文化清潔運動前に「黒色」が対象として追加されたようだ。『中国新聞』がもつ性質からすれば、確かに「黄色」「黒色」のいずれも該当する。なぜ 1954 年に入ってから、急に「黒色」が注目されるようになったかの経緯は不明だが、少なくとも、国民党政府が『中国新聞』の広がりと内容の影響力を以前から問題視していたことがわかる。

20 張文菁、前掲「1950 年代初期の台湾における通俗雑誌の出版――通俗文学市場の形成とその諸相」、40-47 頁。

21 『文芸十年』（中国文芸協会、前掲書、68 頁）と『中国文芸年鑑（中華民国 55 年）』（中国文芸年鑑編集委員会、前掲書、303 頁）に同様の記載がある。

22 ここに挙げられている『ロマンス』『人間探究』『あまとりあ』は、戦後の日本で出版されたカストリ雑誌と呼ばれた通俗誌である。1954 年の時点の台湾でも広く流通していたことがわかる。猟奇や暴露、さらに性的な記事の多いカストリ雑誌が、『中国新聞』をはじめとする、1950 年代の台湾通俗雑誌の内容構成に影響を与えたと見てよいだろう。なお、『ユアンス・アマトリア正・続』は、あまとりあ社より出版された『あるす・あまとりあ』（出版年不明）と『続・あるす・あまとりあ』（1950 年）のことかと考えられる。

23 中国文芸年鑑編集委員会、前掲書、304 頁。発行停止処分は、期間別に、10 ヶ月：『中国新聞』『新聞観察』『紐司』『聯合新聞』『世界評論』、6 ヶ月：『新聞評論』『自由亜洲』、3 ヶ月：『婦女生活』『新希望』『影劇雑誌』。

24 教育部『中華民国建国史：第五編戡乱与復国（三）』台北：国立編譯館、1991 年）、1593 頁。当時の識字者と読者の分析については、張文菁、前掲「1950 年代の台湾における読者とその文学受容――言語および文化の分断からみる通俗小説の流行」を参照。

25 台湾省雑誌事業協会雑誌年鑑発行委員会『中華民国雑誌年鑑（1954 版）』台北：明星印書館、1953 年。雑誌数は、筆者が 1953 年 9 月までに雑誌協会に寄せられた紹介文をもとに集計したものである。紹介文を寄稿しなかった出版社を含めると、その数はもっと多かったはずである。

26 蔡其昌、前掲「国家機器与『反共文学』体制的建立」、97 頁。

27 中国国民党中央委員会第四組「42 年書刊審査案 2266 号」（同上論文、97 頁より転載）。原文：「雖措辞文字，未尽宣伝要求，為用意可取，不失反共立場，似可免於査禁」。

28 『大華晩報』は 1950 年 2 月 1 日に創刊された新聞であるため、「紅魔女」は創刊当時からの連載小説と考えられる。

29 筆者が確認できたのは 1954 年の再版本であるため、明確な出版時期は不明だが、新聞連載が終了した直後と考えられる。なお、この出版社が 1954 年文化清潔運動で「三害」として非難された雑誌『影劇雑誌』の発行元であるのも興味深い。

30 唐賢龍は、二二八事件を『台湾事変内幕記』にまとめた著者として知られる。しかし、同時に唐は 1950 年代の通俗出版を語るには欠かせない存在である。『中華民国雑誌年鑑（1954 年版）』（台湾省雑誌事業協会雑誌年鑑発行委員会、前掲書）を確認した結果、唐賢龍本人は当時の台湾省雑誌協会理事であり、『中国新聞』の発行人、さらに『中国文芸』の出資者である。唐賢龍が書いた作品は、『中国新聞』と『中国文芸』の両方で連載されていた。弟の唐賢翔は同じく雑誌協会の常任理事と、『影劇雑誌』の発行人を務める（『再嫁夫人』の巻末より）。妹である唐賢鳳は『新聞観察』の発行人である。また、『偵探雑誌』と『小説世界』が『新聞観察』と同じ住所に事務所を置いていたこと（『中華民国雑誌年鑑（1954 年版）』、31 頁）から、唐氏兄弟は文化清潔運動で非難された雑誌の多くに関わっていることがわかる。このことからも文化清潔運動の目的に、唐氏兄弟の通俗出版における勢力を削ぐという一面が見えてくる。

31 『中国文芸』もともと 1930 年の上海で王平陵らが創刊した国民党系列の雑誌だった。1952 年に台湾で再創刊された『中国文芸』は、純文芸誌の必要を訴えた唐賢龍が出資し、同じく王平陵を主編として迎えたものである。詳しくは『中華民国雑誌年鑑（1954 版）』（台湾省雑誌事業協会雑誌年鑑発行委員会、前掲書、167 頁）を参照。

32 唐賢龍の「額外的愛情」は、のちに『中国文芸』にて（1957 年 1 月 30 日号から）連載。

33 『探偵小説文選』と『時代小説報』に関する広告は、1956 年 5 月 26 日付の『中国新聞』第 348 号、8 頁から始まった。

34 1957 年 6 月 15 日付の『中国新聞』第 402 期の巻末にある出版目録より。探偵小説文選：①『美麗的死神』、②『長島艶屍』、③『黒猫咖啡室的幽会』、④『被出売的女人』、⑤『女秘書与模特児』、⑥『野女郎的誘惑』（上）、⑦『野女郎的誘惑』（下）、⑧『咖啡倶楽部的奇遇』、⑨『古瓶中的美女』。時代小説報：①『地下夫人』、②『黄色的誘惑』、③『鬼屋妖姫』、④『寡婦情痴』、⑤『艶屍亡魂』、⑥『流鶯涙痕』、⑦『掛名的丈夫』、⑧『愛之帰宿』。

なお、これらの出版物は、すべて1元5角という廉価だったことから、貸本屋のみならず、手軽に購入できるものと考えられる。詳しくは、張文菁、前掲「1950年代初期の台湾における通俗雑誌の出版――通俗文学市場の形成とその諸相」を参照。

35 蔡其昌、前掲論文、99-100頁。次の通俗小説に対する大がかりな行政規制は、武侠小説に照準を合わせた1960年2月「暴雨専案」を待たねばならなかった。だが、その間、政府は単に座視していたわけではなく、条例（1958年6月20日「出版法」修正案）を整備し、執行機関（1958年5月16日台湾省警備総司令部）を発足するなど、成長する通俗小説市場に対して制御をかけようとしたのである。詳しくは、葉洪生、林保淳『台湾武侠小説発展史』（台北：遠流出版、2005年、137頁）を参照。

36 中国文芸年鑑編集委員会、前掲書、305-308頁。

37 沈遐祺「出租書店的主顧／男女老幼皆喜一巻在手／武侠愛情各憑所好選閲」『聯合報』1959年3月17日。原文：「台北市現有一百多家専営出租的書店，経常有六、七万人租看出租書，其中以学生較多、軍人、公教人員，家庭主婦較次（略）記者最近在真善美、祥記、呂氏、第一、大東、黎明、大衆等数家規模較大的出租書店調査結果，発現各書店中，均以武侠書為読者最歓迎，次為文芸、言情、間諜、偵探及翻訳的世界名著。在各類出租書之出租率中，武侠書幾占百份之五十以上。／自各階層人士愛読的出租書中，又発現男学生幾全部愛看武侠，女学生愛看世界名著與文芸；軍人愛看武侠，公教人員愛好武侠、間諜、文芸；家庭主婦愛看言情、偵探、文芸；大学教授、工程師、医師等愛看武侠、偵探」。

38 陳紀瀅「六十年来我国文芸思潮的転変」『六十年小説選』台北：正中書局、1971年、18頁。陳によると、1960年代以降、反共文学は次第に題材の枯渇に陥る。そのため本の売れ行きが芳しくなく、叙述の重点を転換せざるを得なかったという。原文：「漸漸，這類体裁近於枯渇，新的資料，不易捜集；書的銷路，陥於停滞，於是不能不転変方法，另謀発展」。

39 三毛「逃学為読書」『背影』台北：皇冠出版社、1981年、28頁。原文：「初一那年我的成績差強人意，名次中等，不留級。／暑假又来了，我丟下書包，迫不及待的往租書店跑，（略）那家店，就不及「建国書店」高貴，它是好書壊書夾雑著，我租書有年，金杏枝的東西，就没去錯拿過它」。

40 インターネットで検索すると、金杏枝が鴛鴦蝴蝶派作家馮玉奇の筆名であるという言説が流布している。だが、その根拠を示されておらず、真偽は不明である。筆者はこの言説に対して疑問を抱く。主な理由として、金杏枝の初期作品は、本省人の視点から描かれていること、そして言葉遣いに日本語の影響が見られるころである。

41 台湾書店の前身は、台湾総督府文教局に属す教科書などを出版する「台湾書籍株式会社」として知られる。国民党政府によって接収され台湾書局に改名し、台湾省政府の教科書卸売元となった。台湾市立図書館「重慶南路――台北老字号的書店街」（2015年10月5日確認）。
http://blind.tpml.edu.tw/sp.asp?xdurl=superxd/PictorialContent.asp&icuitem=543893&mp=10

42 裘麗「文化書店本版図書簡目」『愛的情書』台北：文化書局、1955年1月再版、巻頭。

43 裘麗「文化図書公司新版図書目録」『白話情書』台北：文化出版、1957年3月、巻頭。

44 両方の巻頭に広告で紹介された作品は5つ。うちスパイを題材とした作品は、『蛇蝎諜妖』と『愛恨交響曲』である。特に『蛇蝎諜妖』は、「反共＋黄色」要素を殊更に強調している。「本作品は裏切りと策略に満ちた、予測不可能なスパイ小説である。潜入先で愛国勇士が経験した数々の危険や緊迫な出来事は、読む者の血をたぎらせる。鉄のカーテンの向こうにいる中国大陸の同胞が共産党から受けた粛清、迫害や惨殺、さらに奴隷のような強制労働、非人道的な残虐政治の数々は特に憤慨させられる。ここで描かれた女スパイの陰険かつ悪辣ぶりは蛇蝎のようであり、淫乱かつ妖艶ぶりは娼婦のようである。だが、その末路はわが愛国勇士によって討たれるのである（下線部のみ訳出）。原文：「《酒家女》：社会写実小説！紅嬌女士名著！業已出版，欲購従速！／本書由紅嬌女士将其悽怨的身世，可歌可泣的遭遇，親筆著成小説。其中情節，並無虚構，完全是写実的作品。雖然沒有什麼曲折離奇。但紅嬌女士以清麗的手筆，委委婉婉敘述她十年來的経過，哀感頑艶，歓笑中含著熱淚，令人同情，令人感傷，這是一部含有文学意味的創作，敬請読者注意！
《蛇蝎諜妖》：裘麗女士継《香港情報員》後又一結晶傑作／這一部勾心闘角神秘莫測的間諜小説，描写愛国志士在敵後種種驚険刺激的事実，令人熱血沸騰。尤其大陸同胞在鉄幕内被共匪清算闘争，迫害殘殺，圧榨奴役，種種淒無人道的暴政，令人髪指。這裡敘述一個女匪諜的陰険毒辣，猶如蛇蝎！荒淫妖艶，彷彿娼妓，但其結果，終於被我方的愛国志士消滅！全書充満了緊張的氣氛，即將出版，特此預告！
《噴火女郎》／火辣辣的故事，風流少婦，面首三千，愛河成苦海！／火辣辣的情節，郎心真摯，悔恨莫及，一死報君恩！
《警匪肉搏戰》：司馬琴著 業已出版，敬請注意／怪指紋謀殺大富翁！負心郎迷恋紅舞女！／大偵探束手無策！

一夜間兩条命案！／女助手智擒劇盜！兇殺案水落石出！
《愛恨交響曲》：馮左明著！ 早已出版！！／間諜愛情小説！詩一様的幽静！画一般的美麗！」

45 紅嬌「編後小語」『酒家女』台北：文化図書公司、1956 年、108 頁。原文：「我是一個酒家女，這是一部叙述我自己生命過程中所遭遇的事蹟，所以這完全是真実的故事。（略）当我離開杏痴家中時，正是民国三十八年的秋天。至今已経是整整七個年頭，在這七年裏我的遭遇更是可歌可泣（略）。不過我預先得告訴諸位，現在我已不是個酒家女了；因為我已獲得了真正有意義的人生。也許有人会関心我和杏痴間的愛情如何的解決？假使諸位不嫌我的文筆幼稚，那麼我在忙裏偸閑中，一定還要将我在這幾年裏苦苦奮闘的経過情形，向大家詳細的叙述」。

46 紅嬌「跋」『酒家女・下集』台北：文化図書公司、1958 年、234 頁。原文：「酒家女這本小説出版後，曽経接到許多読者的来信。其中以女学生最多，軍人次之，商界的較少。（略）大家都頗関心我和杏痴間的愛情究竟如何結局，紛紛要求我趕快将続集写出来。対於続集，我本来不預備写，因為在三十八年至四十年這両年中，我的生活不太正常，且近乎腐化。（略）為了生活，為了要帰還杏痴這筆替我贖身的銭；一個弱女子，孤単無依，不走這条犠牲色相的路，我再没有謀生存的第二個辦法」。

（2015 年 10 月 5 日投稿受理、2016 年 3 月 30 日採用決定）

〔付記〕
本稿は 2015 年 5 月 23 日に開催された第 17 回日本台湾学会学術大会分科会での報告を加筆・修正したものです。研究発表の際、コメンテーターの星名宏修先生（一橋大学）をはじめ、藤井省三先生（東京大学）と山口守先生（日本大学）に多大なご教示を頂きました。また、本稿の修正過程において、査読者および編集委員の先生方からも細部にわたる貴重なコメントを頂いたこと、深く感謝いたします。